2026.1.15

桃山孤立ゼロプロジェクト
調査結果と今後の展開について

第２臨港町内会エリア

目次

1. 目的と背景・・・・・・・・・・・・・・3
2. データ収集方法・・・・・・・・・5
3. 実施結果の概要・・・・・・・・・7
4. 実施結果の詳細・・・・・・・・・12
5. 今後の展望・・・・・・・・・・・・・26
6. 付録・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31
（アンケート結果、関連資料）

1.目的と背景

目的と調査方法

目的：「孤立」を**ゼロ**にしていく。

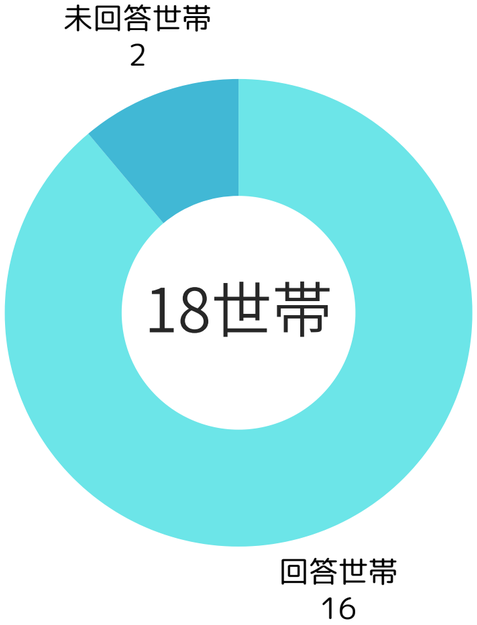
対象エリアお住まいの方の「孤立」に関する意識調査
アンケート調査＋当日の訪問時の聞き取り・様子から
実態を把握する。
調査結果を通して、この地域で孤立をなくすために、
どのような取り組みがいいのか考えていくきっかけや
根拠をつくる。

２.データ収集方法

データ収集方法

11月30日の訪問と回収したアンケートデータ
（エリア住居者・訪問ボランティア）を集計・分析した。

第二臨港町内会居住者
アンケート回答分布



回答率　88.9%

３.実施結果の概要

調査結果から見える地域の様子

高齢化が顕著に進んでおり、70代・80代以上の回答が多い。
単身または夫婦のみ世帯が中心であり、
単身世帯割合が回答全体の約38%のうち高齢単身世帯が25%だった。

調査結果から見える地域の様子

回答世帯の約7割が週1以上の外部との接触がある。
約3割が月1回以下と回答していた。特に低外部接触層は相談先が限定的な回答や無回答も目立っていた。高外部接触層の相談先には「自治・町内会」や一部「行政・相談機関」も挙げられており、相談先の幅広さが見受けられた。

調査結果から見える地域の様子

訪問者からは多くの世帯で自治会や近所の方とのつながりや
公的制度を利用している話や様子が伺えた。
一方で家の様子や近所づきあいについて気になる世帯も一部あった。

外部接触回数と相談先の関係から見えたこと

外部との接触が少ない世帯ほど、家族や知人、医師以外に相談する先がなかった。相談という発想自体が生まれにくく、困りごとが表に出ないまま進んでいる可能性がある。

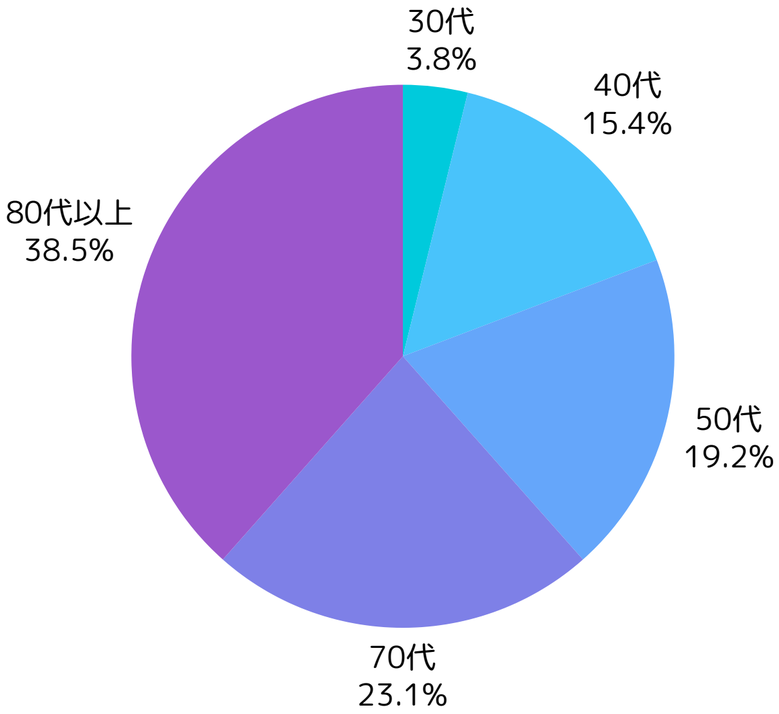
４.実施結果の詳細

アンケートヒアリング内容

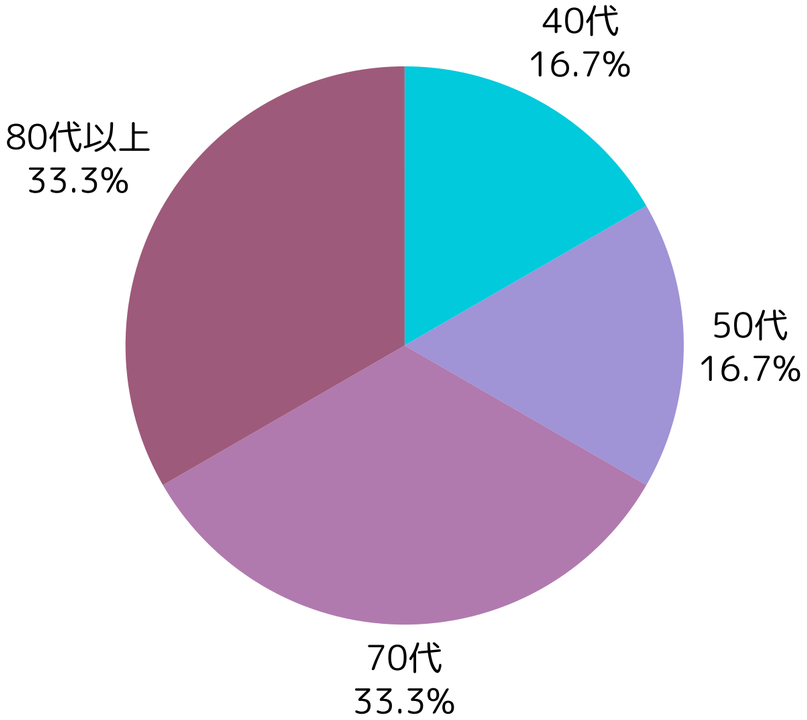
１．お住まいのエリアについて
２．ご家族構成について　※年代別の回答
３．同居していない家族や友人たちと直接会って話す頻度
４．相談できる人の有無
５．お困りのことや不安なこと（必要に応じて連絡先記載）

世帯傾向

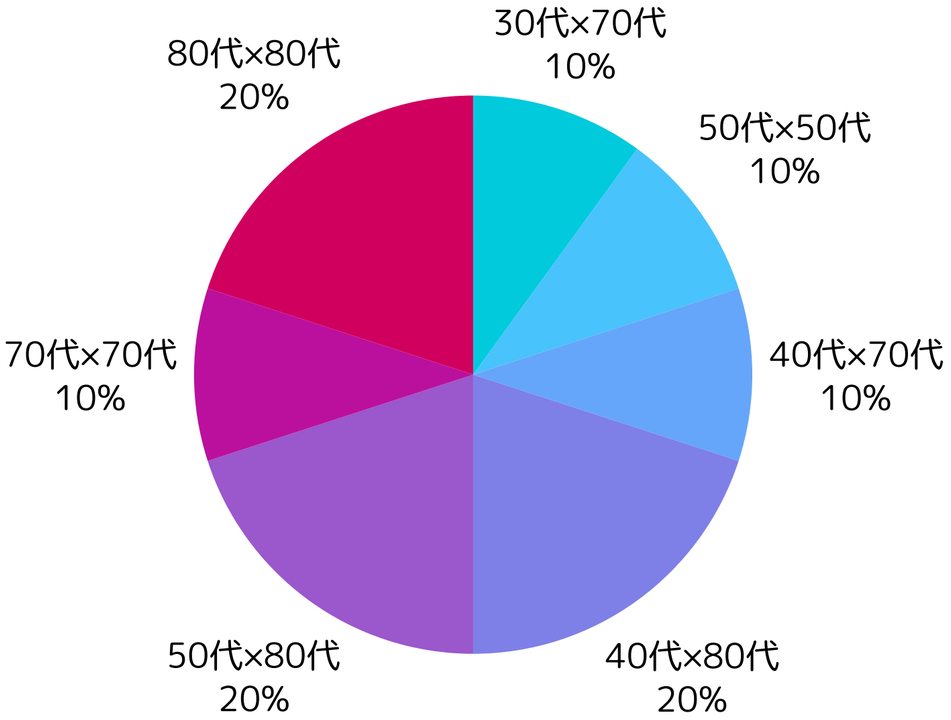
回答者の多くは70代以上が多く、高齢化が進んでいる。2人世帯では
50代以下の世代と住んでいる世帯が多かった。



年代別割合



単身世帯割合

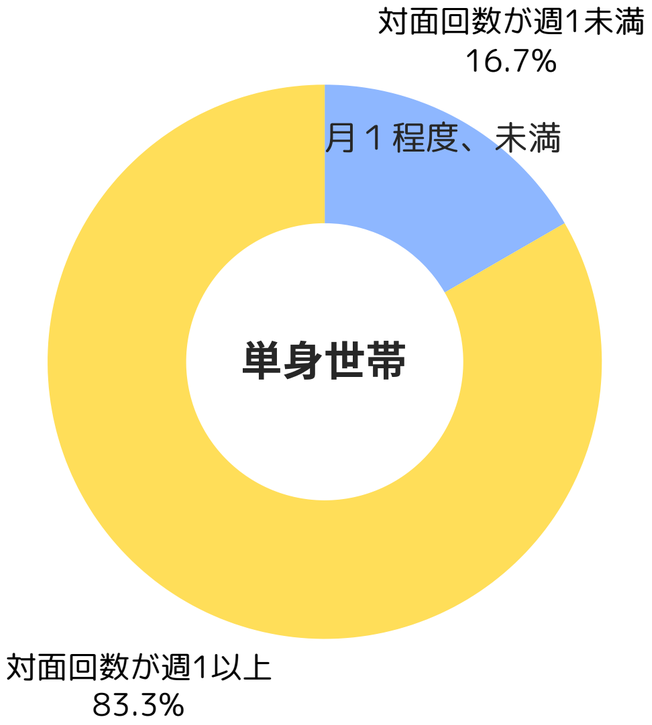


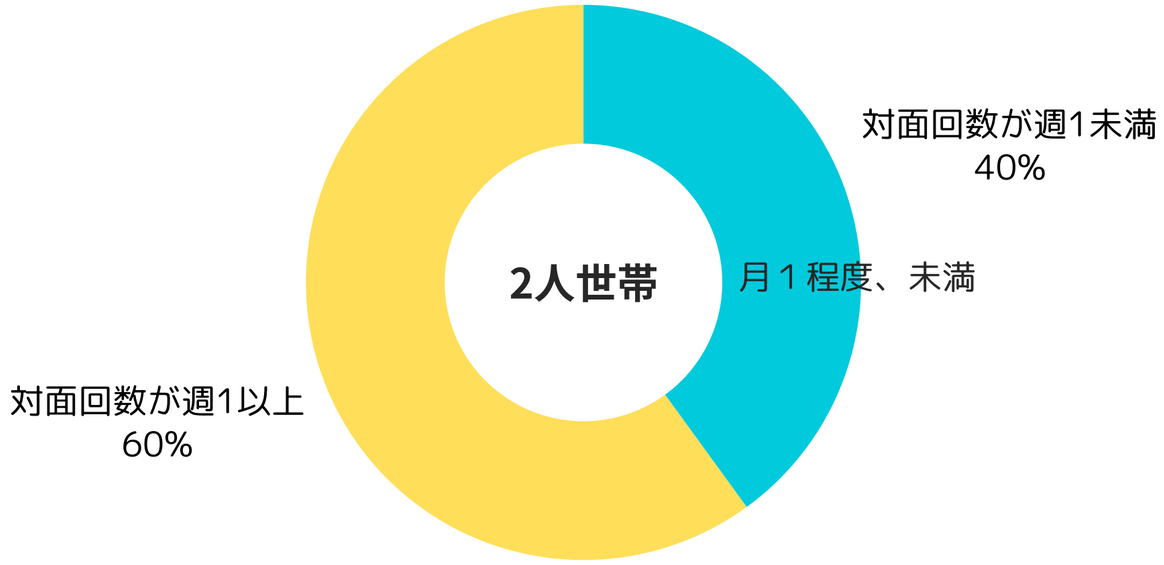
2人世帯割合

同居外の人と会う頻度のエリアごとの割合

週1回以上対面する世帯が多く、ゼロという世帯はなかったが、よく会う層とあまり会わない層に分かれている様子がみられた。

全体の70%が週に1回以上の接触があり、
約30%が月に1回以下の接触と回答が見られた。

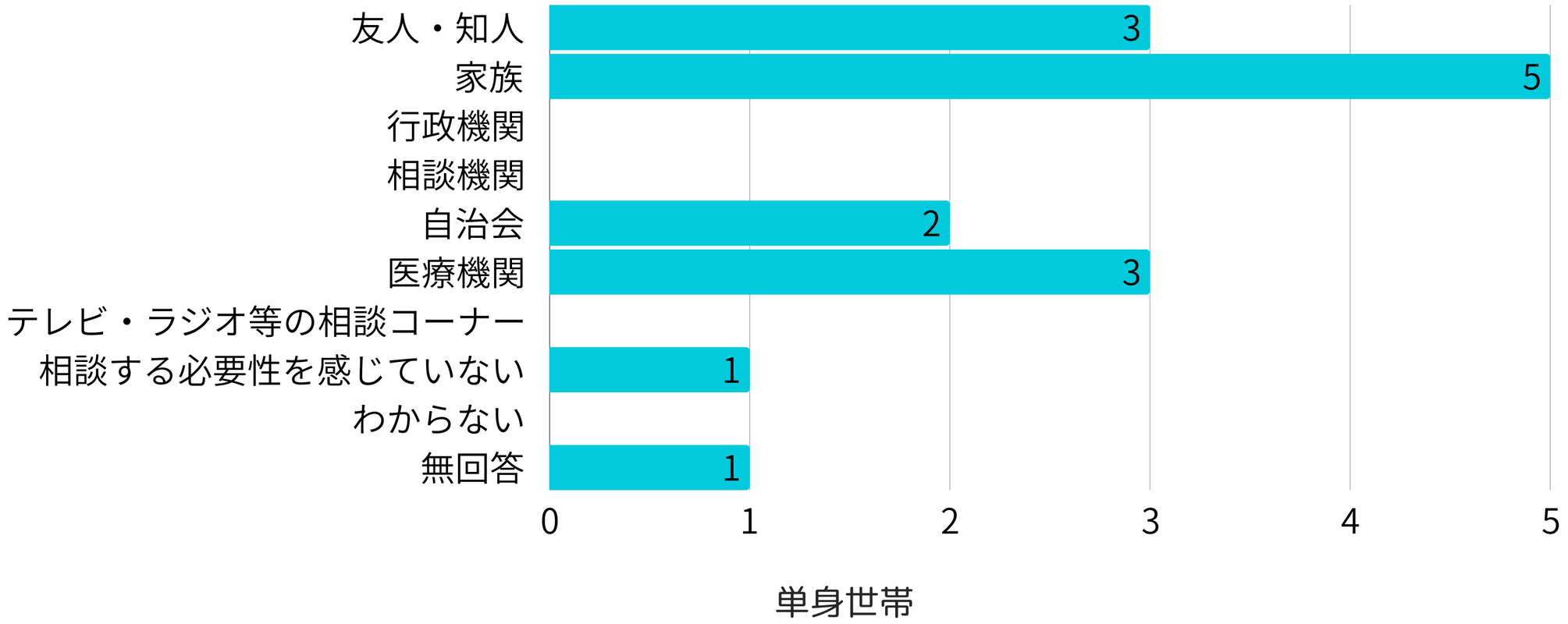




回答項目は、「週4回以上」から「週1回程度」までを週1回以上、「2週間に1回程度」から「全くない」までを週1回未満として扱った。
週1回以上の対面が抗うつ傾向に関連すると考え、この基準を採用している。

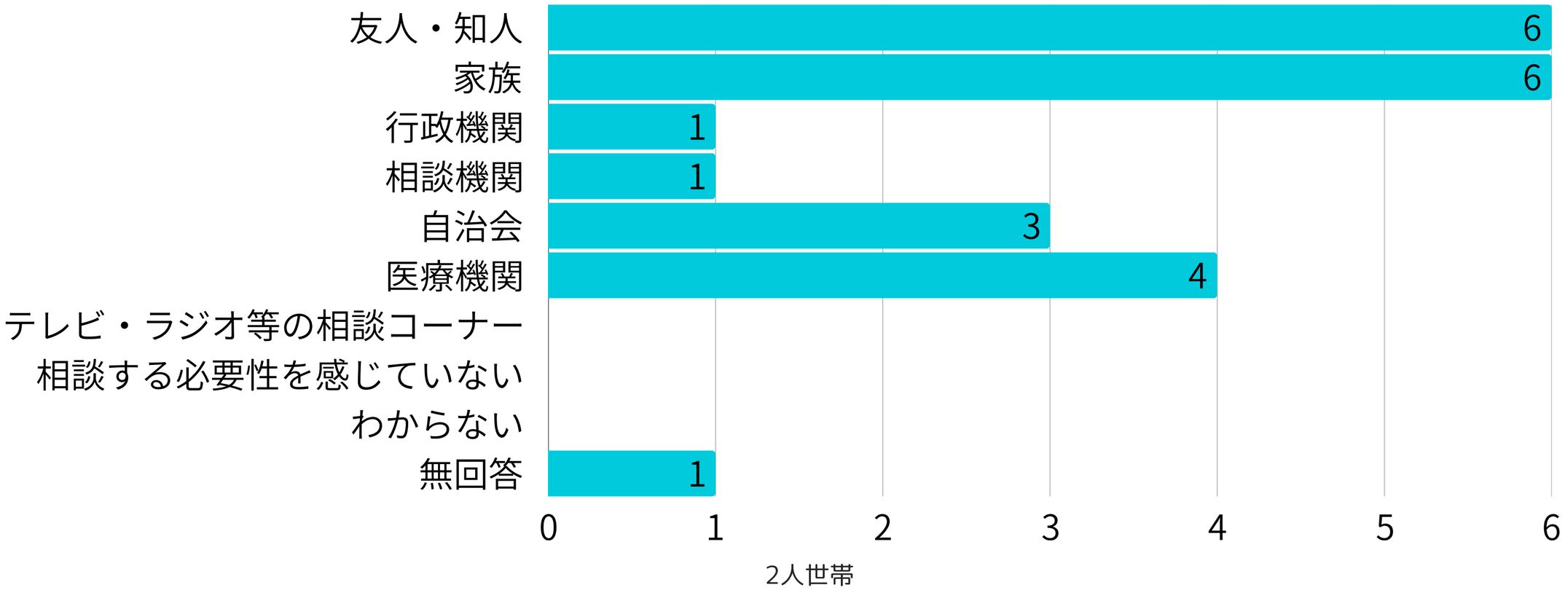
相談できる人は身近にいますか？

単身世帯では、「家族」「友人・知人」の回答数が多いです。
「行政機関」や「相談機関」、「わからない」と回答している世帯はありませんでした。



相談できる人は身近にいますか？

２人世帯も、「家族」「友人・知人」の回答数が多いです。
「相談する必要性を感じていない」「相談先がわからない」と回答している世帯はありませんでした。

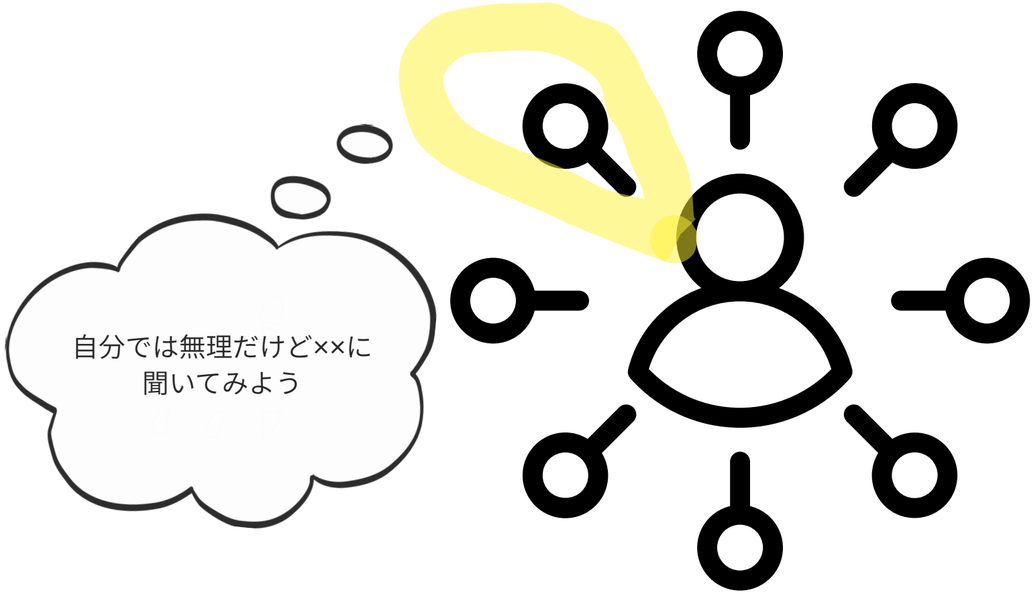


「相談する必要がない」の回答者の傾向

他の相談先は**「友人」「家族」「自治会」**が挙げられており、
相談の必要がないと答えていること、
交流の回数が多いことから
回答者は**不安を感じにくい生活環境にある**と考えられます。
不安が大きくない可能性がある一方で、
潜在的な不安を抱えている可能性も踏まえる必要があります。

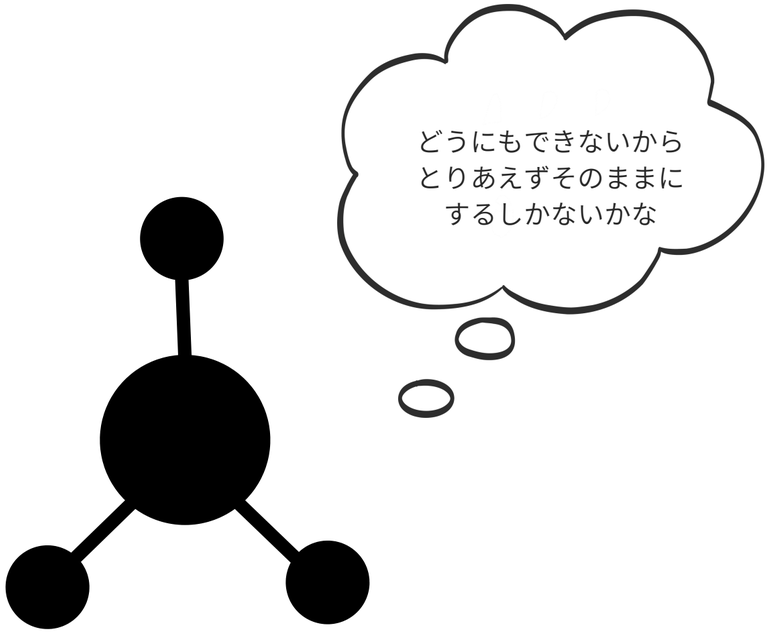
「わからない」「無回答」の回答者の傾向

「わからない」と回答した方はいなかった。
一方、無回答はすべて低接触層の分類のケースだったうえ、高接触層では相談先の選択肢も多かったことから、接触が少ない世帯ほど「相談する」という発想自体が立ち上がっていない可能性を示している。



高接触層は外部と会っていることから
外部とのつながりのイメージをもちやすい

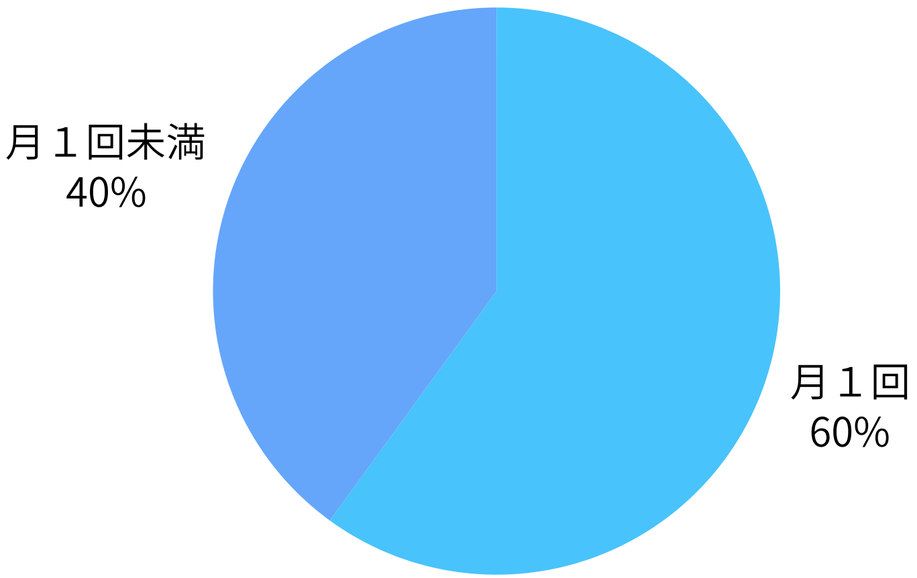
〇〇について自分では
できない…

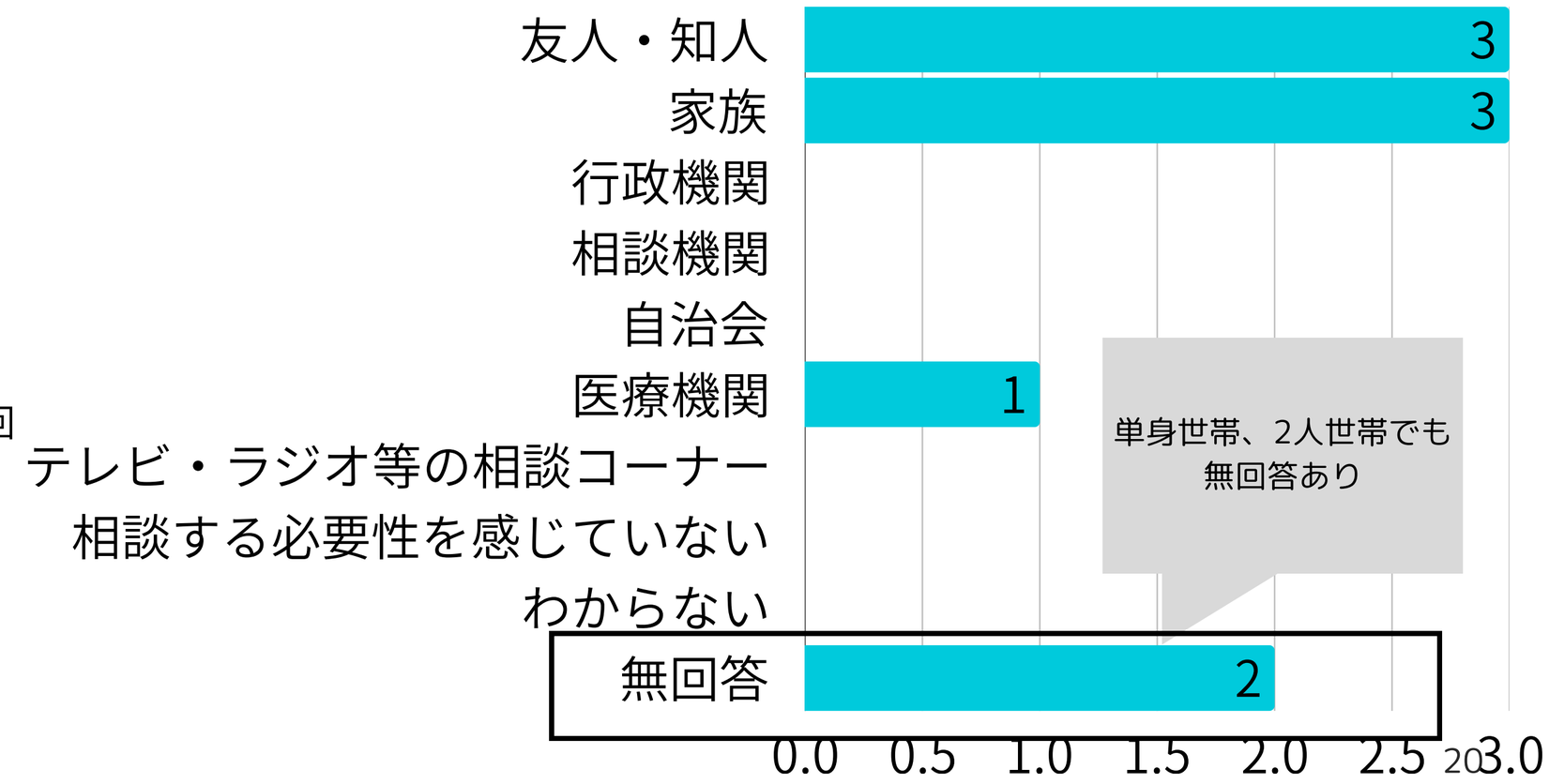


接触回数が少ない世帯ほど、
「どこに相談するか」以前に、「相談してよい」という認識が弱い

対面回数が週１未満の詳細と相談先の回答状況

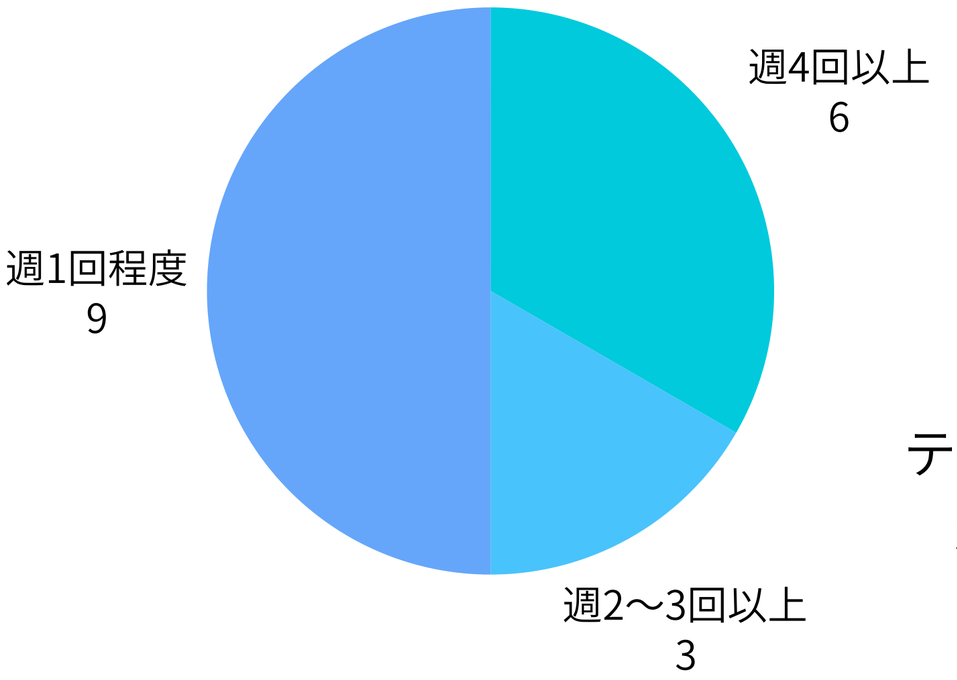
対面回数が週１未満と回答した世帯のうち、相談する必要性を感じていない、わからないと回答した世帯数は**ありません**でした。
行政や相談機関の回答もみられず、無回答もありました。

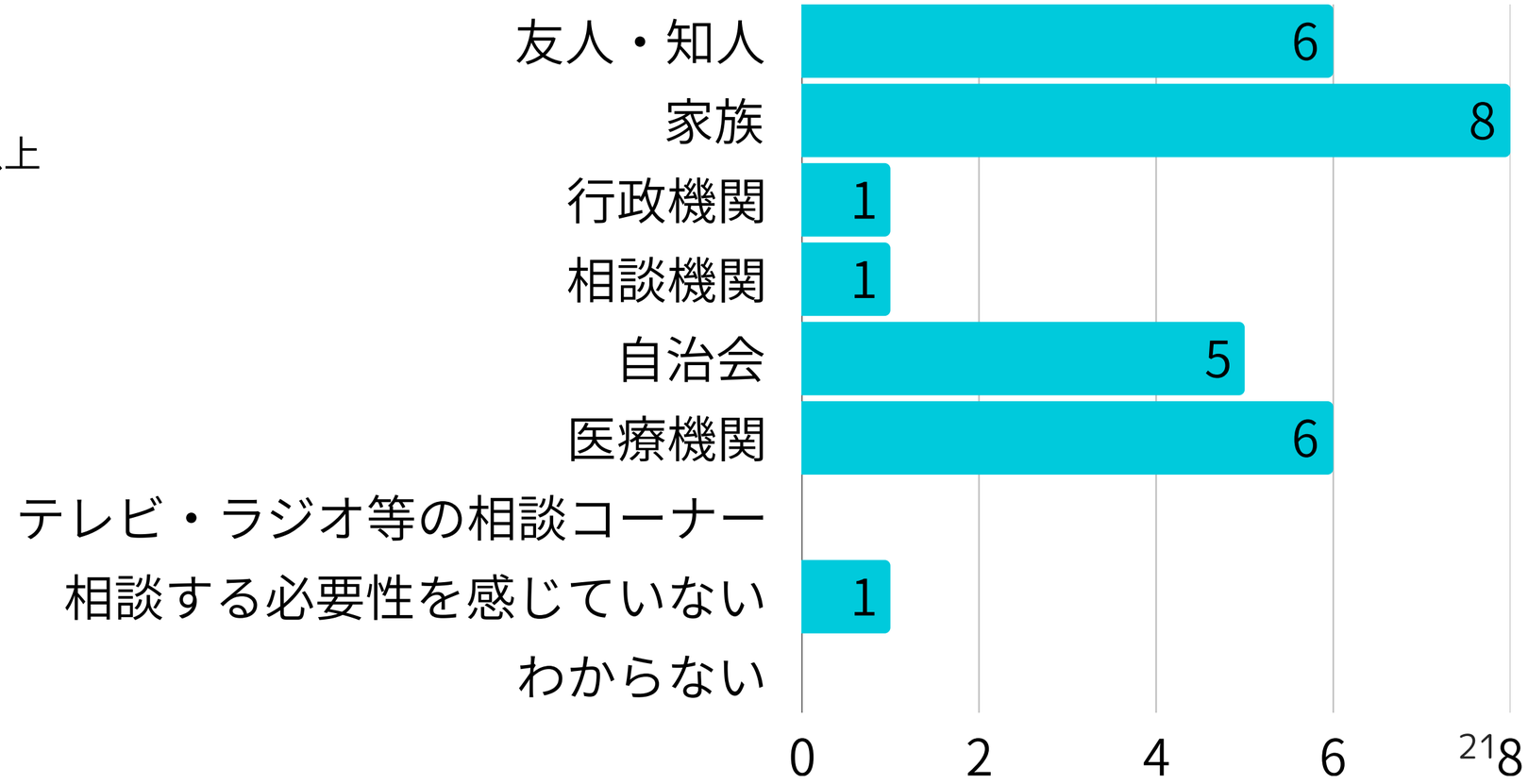




対面回数が週１以上の詳細と相談先の回答状況

対面回数が週１以上と回答した世帯は**相談先も2項目以上回答している世帯も多かった**。「家族」「知人・友人」「自治会」の回答数も多く、**身近なネットワークでの相談をしている**様子が伺えます。





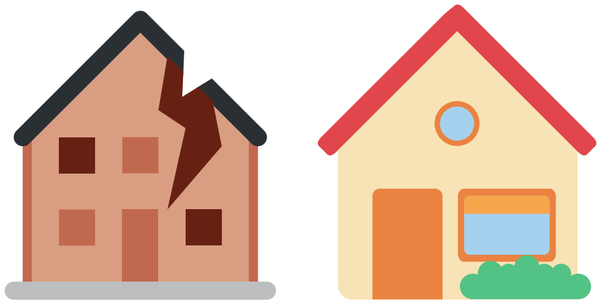
当日訪問者による地域の印象

01

高齢者の多さ

高齢者の多さを感じながらも
地域や公的制度とのかかわり
があることを確認できた

02



住居環境の差

公共スペースがきれい
世帯によっては家屋の状況
が気になる様子もあった

03

住民の様子

近所づきあいをしている様子が
ある世帯や、全くない世帯がい
ることを確認できた

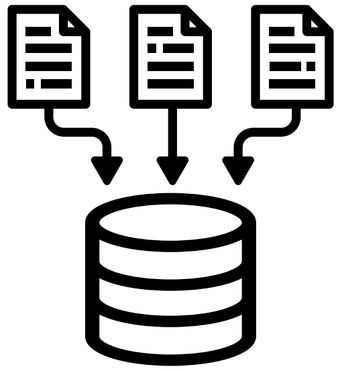
当日参加者による運営の印象

01

事前準備

全体的にスムーズに対応できた
と評価が多かった

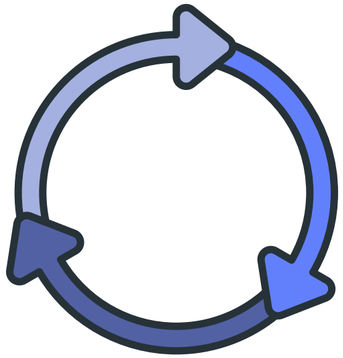
02



回収体制

少人数での訪問体制や
アンケート回収方法の統一の
意見があった

03



継続の重要性

対面の様子を見たり
住民と関係機関とで
情報共有が行われたりしたこと
に意義を感じた

困りごと（自由記述）の回答傾向（総括）

自由記述による困りごとや相談希望に関する**記載は見られなかった**。遠慮や配慮、あるいは「書かなくてもよい」という判断が影響している可能性がある。困りごとはしばしば人間関係の中で浮かび上がるため、記入の有無だけで状況を把握するのは難しいことがある。

困りごと（自由記述）の回答傾向（前回との比較）

前回の市営団地での実施時は、自由記述が多く見られた。これは、市営団地では生活の困りごとが見えやすく、支援につながる機会も多いため記入に抵抗がないと考えられる。
一方で、一軒家の自治会では顔の分かるつながりや遠慮が働き、困りごとが表に出にくい可能性がある。

一軒家地域では、
アンケートだけではなく
信頼関係の中での対話・気づきがより重要

５.今後の展望

個別の対応状況

アンケート紙面では、特に記入はなかった。
訪問者が「気になった世帯」については
公的支援を利用していたり、周囲との関係性が
あることを訪問の中で確認した。

今後考えられる支援策

1. 地域の見守り強化
- 高齢者や低接触層へのﾌｫﾛｰｱｯﾌﾟ定期的な見守り訪問を実施。
- 居場所の開催等の地域活動参加促進。

2. 相談窓口の周知
- 相談への心理的ハードルを下げたりイメージを持ってもらうために
  他の相談事例の紹介や身近な人（自治・町内会、民生委員、ボランティア等）を
  介してつなげる体制づくり。
- 相談窓口の利用方法をパンフレットや地域イベントを通じて目につく機会を増やす。
- 利用しやすい電話相談やオンライン相談の情報提供。

3. 心理的ケアの提供
- 訪問による福祉関係者による個別ケアを開始。
- 孤立感を抱えている世帯には、具体的な相談先を案内。

運営やアンケート調査などの改善

〇次回アンケート設計の改善点
地域によって「困りごとの有無」ではなく
「困りごとの出方」が異なるため、調査方法も変える必要がある。
❌ 直接的すぎる聞き方
「困っていることはありますか？」「相談したいことはありますか？」
⭕ 間接的・安心型の聞き方
「将来、少し心配に感じることはありますか」
「年を重ねたとき、不安に思うことはありますか」
「近所で気になることはありますか」
👉 “今”ではなく“少し先”にずらす
普段地域にかかわっている人・機関の関係性の中の気付きをどう生かすか
〇スケジュール調整
参加しやすいような季節での実施と運営方法

最後に

当プロジェクトに参加してくださった皆様に
地域の「孤立」や生活の様子の気づきを得たり、今後の地域福祉活動の
「きっかけ」にしていただければ幸いです。
今後も一緒に取り組みを進めていきたいと考えております。

ご清聴ありがとうございました。

7 .付録